

柳川神棚

～ 後世に残したい柳川神棚 ～



2022.03

柳川ブランド推進協議会



福岡県知事指定 特産工芸品 柳川神棚

（昭和五十六年三月六日指定）

【柳川神棚の今昔】

江戸時代後期より伝わる柳川神棚。その起源は明らかになっていませんが、神仏混合の様式を残していることから「柳川の宮大工」、もしくは「八女仏壇の木地師」の副業がルーツと考えられています。城下町で寺社が多い柳川には宮大工が多く、近隣の八女・福島は古くから知られる仏壇の産地。さらに隣接する大川市は木工が盛んで、良質な木材が手に入りやすいという地の利もありました。



このような背景から、遅くとも明治中期には

柳川市細工町を中心に産地を形成。

戦前には約25軒の専門店があり、

戦後は一時衰退しましたが高度経済成長期に需要が拡大し、

神棚づくりは最盛期を迎えます。

その後も時代とともに人々の暮らしが変化するなかで、

約二百年にわたって脈々と受け継がれてきた柳川の伝統文化。

その技術と精神を未来に繋ぐ

新たな支えが必要となっています。



障子扉の組み細工



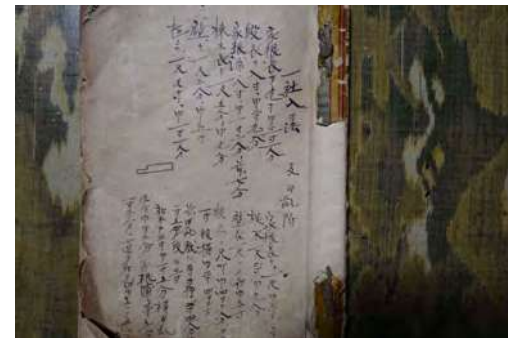
各サイズのカンナや丸カンナ

神棚の宮形には「伊勢型」「出雲型」「太宰府型」があり、柳川神棚は全国的にも珍しい「太宰府型」が主流です。その名の通り、太宰府天満宮の本殿を模した宮形で、屋根正面を飾る弓型の「唐破風（からはふ）」、組み細工の格子が緻密な「障子扉」などが特徴です。神具師の熟練の技を駆使した優美で繊細な意匠こそが、柳川神棚ならではの真骨頂といえるでしょう。

【柳川神棚の様式】



太宰府型・唐破風（からはふ）の型



文字による神棚寸法



【柳川神棚の定型】

柳川神棚に使われる木材は、九州産のヒノキです。まっすぐで節がなく、木目の細かい良質なヒノキ材を選ぶ目利きが重要で、使用するのには主に3〜12mm厚の板。そこから20を超える部品を切り出します。ちなみに九州産にこだわるのは、地産の木材のほうが九州の気候に合い、素木の風合いが長く保たれるから。また、障子戸の裏には格子の棧が美しく映える。紺色の八女和紙を使用しています。



【一社高欄】

扉は観音開きの花障子のみ。お札を重ねて納めるタイプ。

高さ：380 mm
巾：300 mm
奥行：170 mm



【三社高欄】

中央に花障子、左右に長障子があり、お札を並べて納めることができる。

高さ：380 mm
巾：450 mm
奥行：170 mm



【並五社（大五社）】

中央に花障子、左右に長障子が各2枚ある横幅の広い神棚。

高さ：400 mm
巾：650 mm
奥行：170 mm

広く一般に普及する神棚の定型は主に3種類。

いずれも神棚は尺貫法を用いた寸法でつくられ、

扉の数によって「一社高欄」「三社高欄」「五社」に大別されます。

五社には「並五社」と横幅がさらに広い「大五社」があり、

神棚に納めるお札の枚数や大きさ、設置する棚幅に合わせてサイズが選べます。

かつては他にも、台所で荒神様を祀る「並一社」、

家の広さや設置スペースに合わせた別注の神棚も数多くつくられていました。